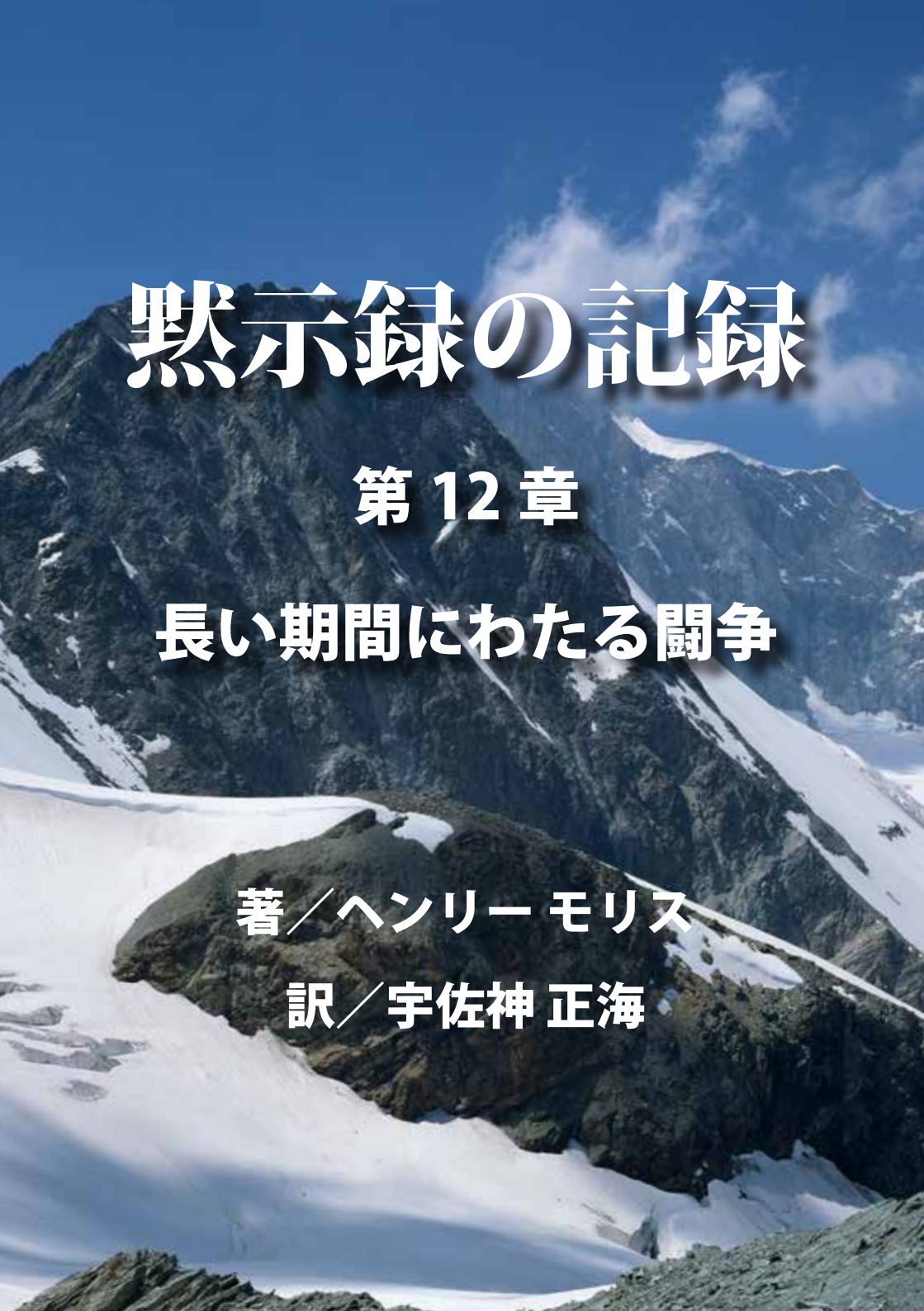

# 黙示録の記録

## 第 12 章

## 長い期間にわたる闘争

著／ヘンリー モリス

訳／宇佐神 正海

# 黙示録の記録

目　次

第 10 章　甘くて苦い相続

第 11 章　創造主の二人の証人

第 12 章　長い期間にわたる闘争

第 13 章　邪悪な三位一体

第 14 章　永遠の福音





# 第12章　長い期間にわたる闘争

この章は黙示録の後半（残り半分）のはじまり、まさにそれはまた患難期の後半のはじまりを画するかのようで、キリストが力と栄光を持って地を治めるために地球に来られる前の三年半です。御前に立つ第7の天使のラッパが鳴り渡り、そのこだまは、この最後の恐ろしい期間大患難の間ずっと鳴り響いています。

## 女の末

しかしながら、この章でヨハネが見た顕著な幻は、何よりもまず、まさに、地球の歴史の始まりを振り返って見、それから、キリストの時代へと素早く進み、そしてついにこの最後の時期に完成する出来事へと進みます。この再吟味（回顧）はヨハネと私たちにとって、まさに示そうとしている大いなるしるしの意義を完



安河内　壽
ジェネシスジャパン会員読書サークル版／回覧＆コピーはご遠慮下さい。

全に理解するために必要でした。

**黙示録12章1節　また、巨大なしるしが天に現われた。ひとりの女が太陽を着て、月を足の下に踏み、頭には十二の星の冠をかぶっていた。**

ヨハネが確かに見ているしるしは文字通りではなく象徴的であることを私たちに伝えているのです。女の人が実際に肉体のままで女の人が太陽を衣として着、月の上に立っている事はあり得ません。

けれども、ヨハネが私たちの注意を惹くためにこのように提示する必要性を感じていたことは大切です。そのとき記述そのものがこの事実の内容を明らかにするのです。黙示録の多くを文字通りにとられるべきと、ヨハネは意味しているはずです。この章はいくらか比喩的ですが、それにもかかわらず、ヨハネはその言及に特に骨を折っているのです。

さらに、聖書の文節が比喩的に理解されるように意図されている時でさえ、この場合のように、常に十分な情報があります。すなわち、直接の文脈かまたは背景にある聖書のさらに広い前後関係から、我々がその完全な意味を見分ける事が出来るのです。

この素晴らしい章の全体の完全なメッセージは、このように壮大な活動範囲であり、ただこの象徴を用いて正しく判断でき、完全に当てはめる事が出来るのです。

ヨハネの幻で、彼が天をじっと見つめた時、太陽は美しい女性の光り輝く衣装のように思われた。輝く太陽の上の彼女の頭には、輪になった十二の星があった。そして、それはいわばその女性の王冠を形造っていた。





地平線に添って低い位置に月が現れた。そして、それは彼女の足を乗せる台を形作っているように思われた。

このしるしの意味は前後で説明されていないので、その解釈のために私たちは聖書のどこかを探さなくてはなりません。事実、新約聖書にもう一人の「天的」婦人について書かれています。「しかし、上にあるエルサレムは自由であり、私たちの母です。」（ガラテヤ書4章26節）。しかしながら、太陽と月と十二の星の特別なつながりは他の所では、ヨセフの夢にだけ見出されます（創世記37章9節）。そこで、ヨセフはそれらを父と母と11人の兄弟を表して、いつの日か彼らは、彼を伏し拝むと理解したのです。

また、イスラエル民族は旧約聖書の中で時々、女性として現わされています。時には、万軍の主の象徴的「妻」として描写されています（イザヤ書54章5～6節。エレミヤ書31章32節、ホセア書2章19～23節）。そして産みの苦しみをする女（イザヤ書66章7～9節、ミカ書4章10節～5章3節）としてさえ描写されているのです。これら用いられている所の一つも黙示録12章の象徴とはこまかい点に至るまで一致しないけれど、これら全部を合わせ検討すると、ヨハネが見た女性は、イスラエルを現わしていると暗に示しているようです。すなわち、真のイスラエル、創造主の約束を信じたイスラエルの残りの民で、彼らは、イスラエルの同じ世代の人々を通して主のことばに従う道を尋ね求めていた。

しかし、この女の末に関して続いて起こる強調が、私たちをイスラエル民族の初期まででではなく、エデンの園でなされた原始福音の約束まで遡ります。エデンの園で、創造主は蛇と女の、そして、女の末と蛇の末とのあいだの（創世記3章15節）何世紀にもわたる闘争について予告しています。そしてその闘争こそこの章で見えてくるのです。（ヨセフの夢の中で、その女は彼の母ラケルを現わしているようです。ラケルはその時すでに死んでいるけれども、ラケルの姉レアは、ユダの母であった。ユダ部族から結局メシヤは来たのです。）



安河内 壽
ジェネシスジャパン会員読書サークル版／回覧＆コピーはご遠慮下さい。

それゆえ、女はイスラエル（イスラエルの忠実な残りの民）を含みますが、イスラエルを超えて、歴史の初めに戻らなくてはなりません。ラケルでもエルサレムでもなくエバが、肉体的意味で真の『我々すべてのものの母』で、そしてそれは、彼女に対し原始福音（女の末がいつの日か蛇の頭を打ち砕く）との約束が与えられたことに関係していたのです。こういうわけで、女は信者の全集団を表わしています。真のイスラエルが創造主の妻、キリストの花嫁としての真の教会を表わしているように、この壮大な女は、エバをはじめとしてすべての真の信者を表わしているに違いありません。

彼女の衣は太陽で、足もとには月があります。太陽の輝きは、「世の光」（ヨハネによる福音書8章12節）であるキリストの栄光の描写です。信者たちは、みな「主イエス・キリストを着なさい」（ローマ人への手紙13章12、14節）と言われているように、「闇の業を捨てて、光の武具をつける」べきです。すなわちキリストご自身が私たちの栄光の衣服です。そして、この事実が太陽を着た女の雄大な象徴の基本的な意味のようです。

（同様に）女の足に踏みつけられた月は投げ捨てた闇の業を表わしているに違いありません。月は太陽のような本当の光ではありません。月の光は光の模造品に過ぎず、月そのものが輝いているのではなく、太陽の光を反射しているに過ぎないのです。聖書で「足の下」と記されている対象物は、いつでも、従属して、踏みつけられ、束縛の下に置かれていることを表わしています（詩篇91篇13節、Ⅰコリント人への手紙15章25節）。

このように、この節で天に描かれた女は全ての時代を通して救いに与った人々の大集団を描いたものと言うのが多分もっとも的を射ているようです。彼らは偽りの「光の天使」に打ち勝っています（Ⅱコリント人への手紙11章14節）。そして、サタンを彼らの足の下に踏みつけ（ローマ人への手紙16章20節）ています。そして、彼ら自身を





キリストの義の衣で覆い隠しているので、彼らは「彼らの父の御国で、太陽のように輝いています」（マタイによる福音書13章43節）。

女の頭の上の十二の星の冠は、イスラエルの十二部族（黙示録21章12節）か、又は恐らく彼らの各々の天使たち（天使たちは聖書でしばしば星々と呼ばれている）か、さもなければ、小羊の十二の使徒たち（黙示録21章14節）か、または、たぶん両者を表わしていると思われます。丁度、キリストが正しい者は太陽のように輝き出ると言われたように、天使はダニエルに「多くのものを義とした者は世々限りなく星のようになる」（ダニエル書12章3節）と告げられていたのです。

黙示録12章1節の女はイスラエルであるという一般に受け入れられている解釈は、このように、この光景が置かれている素晴らし文脈の解釈にとってあまりにも狭い解釈であるのは明らかです。イスラエルが含まれるのは確かですが、エバ自身で始まった全時代を通しての創造主の民すべてなのです。

**黙示録12章2節　この女は、みごもっていたが、産みの苦しみと痛みのために、叫び声をあげた。**

創造主は原初の良きおとずれの約束をエデンの園でしました。「わたしは、おまえと女との間に、また、おまえの子孫と女の子孫との間に、敵意を置く。彼は、おまえの頭を踏み砕き、おまえは、彼のかかとにかみつく。」（創世記3章15節）。これらのことばはサタン、あの古い蛇、黙示録のこの章の中心人物その者に向けられていたのです。サタンと「女」（すなわち、信じているすべての女の人）との間には絶えることのない敵意があるはずであり、また、蛇の末（すなわちカインの様に創造主とその言葉を拒否するすべての人々）と女の末



安河内 譲
ジェネシスジャパン会員読書サークル版／回覧＆コピーはご遠慮下さい。

（すなわち、アベルの様に、創造主を信じ、それゆえ、どんな代償を払おうと、創造主とその言葉に従おうとするすべての人々）の間にもたえることのない敵意があるはずだったのです。

しかし、いつの日か、「蛇の末」の原型が来ます。その人は、サタンの化身そのもので、彼の父、偽りの父（ヨハネによる福音書8章44節）の性質を具体的にかつ完全に表しており、彼は、「不法の人、すなわち滅びの子」（Ⅱテサロニケ人への手紙2章3節）であり、彼の悪い所業は黙示録の主な題目です。

この最後の巨大な蛇の末裔を打ち負かす方は、原型であり、完全な「女の末裔」となる創造主の御子、男の種から生まれたのではなくて、処女から生まれた方です。けれども、御子が蛇の頭を打ち砕く前に、蛇は彼のかかとに傷を負わせなくてはならない。そして、この闘争は、御子が聖なるみこころによって聖定された妊娠と出産の過程を通して人の家族に入ることが必要で、（もちろん、この特殊な場合は、奇跡的妊娠と処女降誕によるのです。）特に、大空にある女の巨大なしるしに見られるのがこの降誕です。

しかし、女は処女マリヤだけではありません。この幻にある女は、歴史全体に見られる女の人たちです。マリヤは有史以来の創造主を敬うすべての女性の代表に過ぎなく、彼女たちの誰をでも御子が人の生涯を送る入口の道具として用いるため、マリヤと同じように創造主がお選びになることが出来たのです。このような婦人たちは皆エバの呪いに与っていました。悲しみと痛みを妊娠と出産時に経験していました（創世記3章16節）。それにもかかわらず、この責任に対して、創造主の約束を信じ服従して、信仰を持ち続けた女たちは実に豊かな祝福を受けていました。それは「しかし、女が慎みをもって、信仰と愛と聖さとを保つなら、子を産むことによって救われます。」（Ⅰテモテへの手紙2章15節）、とある通りです。





事実、なお他の意味で、この産みの苦しみにある女性は、すべての被造物を描写しています。そして、全被造物は罪のゆえに創造主の呪いの下にうめき苦しんでいるすべての被造物を描いています。しかし、救出に関する創造主の約束が成就するのは確かです。その時、天で約束された解放者が来ます。「それは、被造物が虚無に服したのが自分の意志ではなく、服従させた方によるのであって、望みがあるからです。被造物自体も、滅びの束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由の中に入れられます。　私たちは、被造物全体が今に至るまで、ともにうめきともに産みの苦しみをしていることを知っています。」（ローマ人への手紙8章20～22節）。彼女が子を産む時、彼女自身が究極的に産みの苦しみから解放されるのです。

すべての人類に与えられたやがて来られる救い主、女の末に関する創造主の素晴らしい御約束は、結局、特に選ばれた国民、選ばれた部族、選ばれた家族、そして最後に選ばれた女にて成就されなくてはならなかったのです。こうして、この世界に対する約束は、イスラエルに対する、それからユダ部族に、それからダビデの家系に、そして最後に乙女マリヤに対する約束となりました。この天にある同じ女は、これらすべてを形で表しているのです。

それゆえ、これらのすべては、女の末が生まれるまでは生みの苦しみをしなければなりません。その上で約束された解放が最後に完了するのです。イスラエル民族は特に悩みます。「シオンの娘よ。子を産む女のように、身もだえし、もがき回れ。今、あなたは町を出て、野に宿り、バビロンまで行く。そこであなたは救われる。そこで主はあなたを敵の手から贖われる。」（ミカ書4章10節）。

「ベツレヘム・エフラテよ。あなたはユダの氏族の中で最も小さいものだが、あなたのうちから、わたしの



安河内 壽
ジェネシスジャパン会員読書サークル版／回覧＆コピーはご遠慮下さい。

ために、イスラエルの支配者になる者が出る。その出ることは、昔から、永遠の昔からの定めである。それゆえ、産婦が子を産む時まで、彼らはそのままにしておかれる。彼の兄弟のほかの者はイスラエルの子らのもとに帰るようになる。彼は立って、主の力と、彼の神（創造主）、主の御名の威光によって群れを飼い、彼らは安らかに住まう。今や、彼の威力が地の果てまで及ぶからだ。」（ミカ書5章2～4節）

この栄光の息子の誕生に、多くの事がかかっています。彼がイスラエルを贖い支配するだけではなく、彼はすべての被造物を栄光の自由に引き入れます。「ひとりのみどりごが、私たちのために生まれる。ひとりの男の子が、私たちに与えられる。主権はその肩にあり、その名は「不思議な助言者、力ある神（創造主節）、永遠の父、平和の君」と呼ばれる。」（イザヤ書9章6節）

## あの古いヘビ

**黙示録12章3節　また、別のしるしが天に現われた。見よ。大きな赤い竜である。七つの頭と十本の角とを持ち、その頭には七つの冠をかぶっていた。**

ここで、天に別のしるしが現れた。これはもう一つ別の象徴的役割で、宇宙の壮大なドラマを完全に理解しようとするなら、ヨハネが理解しなければならないものです。その宇宙規模のドラマとは、世界の基が置かれてから天と地で起こってきたものです。創世記3章15節の原始福音の約束には、二つの主要な登場者章蛇と女があった。同様に、ヨハネが見たこの大いなる二つの不思議なしるしは最初に女、それから蛇が天の





中心で観察された。

もちろん蛇は巨大な赤い竜と同じで（9節を参照）、サタンを意味するのは間違いありません。古代の物語に出て来る竜が新約聖書で出て来るのは黙示録だけですが、旧約聖書（詩篇91篇13節）【（欽定訳聖書では、若獅子とドラゴン）イザヤ書34章13節（欽定訳聖書では、ドラゴンのすまい、フクロウの宮殿）】ではしばしば言及されていて、明らかに本当の動物と考えられていた。今日、恐竜として知られている巨大な爬虫類がかなり近代まで生きてさえいたという科学的証拠が増え続けています。若干の水棲恐竜が今日世界で人が近づけない深海や深い湖の中に今でさえ生きているかも知れないと考えてさえいるのです。そしてそれは、おそらくヨハネが空に見たサタンの大きな象徴を物語るための原型の動物を用意されたのでしょう。

このドラゴン（竜）の色は燃えるような赤色で、恐らく竜の最終的年命である炎を予見していることでしょう。けれど、この竜、あるいは恐竜は、通常に見られる竜ではありません。ギリシャ神話のゴルゴン（*脚注）に似て、九頭の蛇であってことの他恐ろしい。その七つの頭には冠がついていた、そして王の様な権力を持つことを示しています。これらは、後で過去の七つの王国として解説されてます（黙示録17章9～10節）。十の角は、終わりの時代の十人の王たちとして説明されています（黙示録17章12節）。ただ、ダニエルが見た幻の獣は十の角を持つ一つの頭だけだった事を除いて、ダニエルが見た幻に何か似ています「たった1つの頭に十の角を持っていた幻の獣を除いて、ダニエルは何か同じような幻を見ていたのです。（ダニエル書7章7，20，24節）。

これらの王たちと王国を同定するためには、17章の解説を見て下さい。差し当たり、彼らはこの世の王国を代表しているといえば十分で、概して、このような王国は、実際サタンの支配下にあると言ってよいでしょう。黙示録に出て来る七という数字は完全性を表わす象徴として用いられているので、過去と現在の異邦人



安河内 壽
ジェネシスジャパン会員読書サークル版／回覧＆コピーはご遠慮下さい。

のすべての王国はたいていサタンの支配下に置かれていたことをこの幻は確認していると思われます。彼こそ「全世界を惑わす」者です（9節）。

（※）脚注：ゴルゴン章見る人を石に変えたと言われる恐ろしい姿の3人姉妹、中でもメドウサがよく知られている

これはもちろん、キリストを誘惑した時のサタンの主張そのものでした。「また、悪魔はイエスを連れて行き、またたくまに世界の国々を全部見せて、こう言った。「この国々のいっさいの権力と栄光とをあなたに差し上げましょう。それは私に任されているので、私がこれと思う人に差し上げるのです。」（ルカによる福音書4章5～6節）

慎重に考慮する時、人の建てたすべての政府が、結局サタンに支配されている事を理解できます。たとえ創造主ご自身が、上に立つ権威を制定され（ローマ人への手紙13章1節）、クリスチャンに彼らの制定に従うように命令していた（Ⅰペテロの手紙2章13節）としてもです。政治的権威の座に多くの創造主を敬う人々がおり、これらの人々はサタンの支配に対し抑止力を発揮してきました。さらに、政府は人々よりある程度法律に基づいており、これら法律は聖書に記された創造主の律法に基づいていて、ある程度その上に築かれているのです。

このように、政府はサタンの目的より創造主の目的に従っているのです。これがおおよそ、イスラエルの歴史でこの様な例に当てはまると思われる時代が、いくつかありました。同様にイギリス、アメリカ合衆国、その他のありふれたキリスト教国においても同様の時代がありました。けれども、残念なことに、サタンの主張はほぼ完全にと云ってよいほど真実なので、キリストご自身がそれをわざわざ拒否されなかったのです。

ヨハネもまた、彼の書簡で、「私たちは神（創造主）からの者であり、全世界は悪い者の支配下にあること





を知っています。」（Ⅰヨハネの手紙5章19節）と述べていました。実際に、過去の世界の王国は皆、七つの頭で象徴的に現わされており、十の角で表わされている世の終わりの十の主な王国は、偉大な炎のように赤い竜に導かれた霊と緊密に結び合わされています。

**黙示録12章4節　その尾は、天の星の三分の一を引き寄せると、それらを地上に投げた。また、竜は子を産もうとしている女の前に立っていた。彼女が子を産んだとき、その子を食い尽くすためであった。**

竜は地上の国々を支配しているだけではなく、天の星を地に引きずり落としさえしているのです。

ヨハネがこの驚くべき現象を観察した時、「わたしが見ていると、サタンが、稲妻のように天から落ちました。」（ルカによる福音書10章18節）という主のことばを思い出したのは確かです。サタンの権威をもってしても、当然のことながらサタンが創造主に打ち負かされるはずであった。創造主はサタンを既に天から追放しており、彼が地へ投げ落とされた様は稲光に比べられるほど速やかであったのだから。

これはまたイザヤ書14章12～15節の「暁の子、明けの明星よ。どうしてあなたは天から落ちたのか。」との問いかけに、エゼキエル書28章16，17節（口語訳）の「私はあなたを追い出す、主護者ケルブよ、…わたしはあなたを地に投げ出し」との光景に連なる出来事でもあった。サタンが大勢の天使を管轄下に置いていることは長い間知られていました。キリストご自身が、「悪魔とその御使いたち」（マタイによる福音書25章41節）について語られました。ここで、初めてこれらサタンに付く天使たちはすべての天使たちの三分の一に当たる事を私たちは学び知るのです。悪魔に付くしるしのある星々が、悪しき天使たちに対応する事は、7節から9節



安河内 壽
ジェネシスジャパン会員読書サークル版／回覧＆コピーはご遠慮下さい。

で明らかです。創造主の御座にあった高い立場からサタンが地に投げ落とされた時、サタンの反逆に従った大勢の天使たちもまた否応なしに天から出て彼に従わざるを得なかった。そして、それによって彼らすべては、「この暗やみの世界の支配者たち」（エペソ人への手紙6章12節）となっています。そして今や、イエス・キリストは十字架上で、すべての「支配と権威」の武装を解除したのです（コロサイ人への手紙2章14，15節）。

サタンが地に投げ落とされた時、サタンはすばやくエバに勝利したが、その時、創造主は女の末によってやがてサタン自身に来る破滅を宣告された。このことがきっかけで、サタンはこの預言の成就を妨害する長年の努力が始まったのです。それは約束された末裔と思われる者は誰かれの区別なく誕生後出来るだけ早く殺すか、そうでなければ、出産を完全に妨げるかによって妨害する事でした。

サタンは彼自身の悪い思いをカインの心に植えつけ、それからアベルを殺すようにカインを導いた。「カイン・・・。彼は悪い者から出た者で、兄弟を殺しました。」（Ⅰヨハネの手紙3章12節）。レメクが彼の息子ノアに関するメシア預言と思われる預言をした時（創世記5章29節）、サタンは、大胆にも彼自身の致命的な種子で全人類を毒殺しようとしたのです。「神の子たちが人の娘たちのところにはいって、娘たちに産ませたものである。口語訳」（創世記6章4節）。この異常な文節の前後関係は、悪霊付きの途方もない発生があったことを暗に示しています。サタンに付く天使たちは、洪水前の大勢の人々と彼らの子孫の精神と肉体に住みつき支配出来るはずでした。

アブラハムの時代に、創造主が奇跡的に介入するまで、サタンは明らかにアブラハムに約束された息子が妊娠するのを妨げる事さえ出来ました。さらに挙げると、ヤコブを滅ぼすようにした出来事、ヤコブの三人の息子に対して、主が拒絶するように導いた出来事、ユダの最初の二人の息子を創造主が殺している出来事





などです。モーセが生まれた時には、サタンはパロを通してイスラエルの生まれて来るすべての男子を殺そうとするほど大胆になりました。ダビデの生涯でサウロや他の者たちの多くの企て、ユダとその家系を継いだ王たちとその家族を堕落させるか、または滅ぼすかのいずれかにしようとして繰り返された努力、そして、最後に、王妃エステルの時代に、ハマンが捕囚となっていたユダヤ人すべてを殺そうとした企みがほぼ成功していた戦略、キリストが世に来る前に約束の末の系図を滅ぼそうと努力したサタンの働きはたえず継続されたのです。

イザヤの時代に、女の末に関わる原初の約束は、きわめて明白でした「見よ。処女がみごもっている。そして男の子を産み、その名を『インマヌエル』と名づける。」（イザヤ書7章14節）。遂に、約束された家系に、約束されたところで、約束された時に選ばれた処女が約束の末を生んだ。モーセの時代にしたように、サタンはもう一度ヘロデを通して、この時はベツレヘム近郊にいるすべての男子を殺すことで、約束の末を見出し殺そうと企て着手した。そして、それによって「生まれるとすぐ約束の子を滅ぼそう」のサタンの努力は持続されたのです。しかし、創造主に失敗はあり得ないのに、サタンは常に失敗したのです。

サタンはイエスが十字架に架かる前にキリストを何回も殺そうとしました。サタンが誘惑してキリストの聖さを無効にできなかった時、サタンは何度もキリストを殺そうとしました。しかし、いつも失敗に終わりました。しかし、定めの日が来て、キリストは十字架に架かり、「その死によって、悪魔という、死の力を持つ者すなわち悪魔を滅ぼし、」（ヘブル人への手紙2章14節）たのです。

すべての時代を通して、サタンは、約束された末の使命の成就を妨げようとして、絶えずエバからマリヤに至る約束の家系にある女に立ち向かい、彼女の産む男の子を彼が使命を達成する前に殺そうとしてきまし



安河内 壽
ジェネシスジャパン会員読書サークル版／回覧＆コピーはご遠慮下さい。

た。彼の失敗は、今までよりもますます苛々しい怒りに彼を追いやり、彼の出来るあらゆる方法を用いて象徴的女と彼女のすべての子孫を迫害し続けています。

**黙示録12章5節　女は男の子を産んだ。この子は、鉄の杖をもって、すべての国々の民を牧するはずである。その子は神（創造主）のみもと、その御座に引き上げられた。**

イエス・キリストに関わるこの約束の最初の成就は、詩篇2篇7～9節で言及されていることから明らかです。「主はわたしに言われた。『あなたは、わたしの子。きょう、わたしがあなたを生んだ。わたしに求めよ。わたしは国々をあなたへのゆずりとして与え、地をその果て果てまで、あなたの所有として与える。　あなたは鉄の杖で彼らを打ち砕き、焼き物の器のように粉々にする。』」。諸国の民は創造主と創造主に油注がれた者に喜んで従おうとしないので（詩篇2篇2節）、キリストは彼らを力づくで従わせ、その上、彼らを鉄の杖で支配しなければなりません。キリストが最終、的に王たちの中での勝利の王として彼らを最終的に征服する時、この方こそ「この方の口からは諸国の民を打つために、鋭い剣が出ていた。この方は、鉄の杖をもって彼らを牧される。」（黙示録19章15節）キリストであることがわかるのです。

しかしながら、既に述べたように、この約束は、二義的な意味では純粋にキリストを信じているすべての人に当てはまり、それゆえ、キリストと共に征服する人々も組み込まれます。「勝利を得る者、また最後までわたしのわざを守る者には、諸国の民を支配する権威を与えよう。彼は、鉄の杖をもって土の器を打ち砕く





ようにして彼らを治める。わたし自身が父から支配の権威を受けているのと同じである。」（黙示録2章26，27節）。丁度大いなるしるしに写し出された女が、つまるところキリスト降誕前の創造主につくすべての人々、特にイスラエル民族に当てはまるように、象徴的人の子は、キリスト御自身だけでなく、救われる名としてキリストを信じているすなわちキリストにあるすべての人々に当てはまるのです。

その女の子は竜にむさぼり食われる代わりに、天にある創造主の御座に携え挙げられた。これは主として、「創造主の御座の右に着座され」（ヘブル人への手紙12章2節）たキリストの甦りと昇天に言及したことに違いありません。

けれども、「引き上げられた」という言葉は、厳密にはキリストの再臨の時に成就する信者の携挙と関連して用いられていることばと同じです。その時、私たちは「彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。」（Ⅰテサロニケ人への手紙4章17節）。こういうわけで、男の子はキリストとキリストによって贖われた人々なので、男の子を引き上げたのは、キリストの昇天だけでなく聖徒の携挙と栄化にも言及していると思われます。それには、おそらく、二人の証人の携挙（黙示録11章12節）と患難期の他の聖徒たちも含まれていることでしょう。

**黙示録12章6節　女は荒野に逃げた。そこには、一二六〇日の間彼女を養うために、神（創造主）によって備えられた場所があった。**

キリストの昇天、その後ローマ人によるエルサレムの破壊、ユダヤ人の残りの民は死海地方の荒野に逃亡、



安河内　壽
ジェネシスジャパン会員読書サークル版／回覧＆コピーはご遠慮下さい。

そして、歴史に名高いマサダでの集団自決があった。けれども、これはこの節に記された出来事を意味するとは取れません。なおその上に、ヨハネの時代には、この預言の成就は将来の事として待たれていたのです。それは男の子が引き上げられた後に続きます。そのあと教会の携挙とおそらく、既に述べたように二人の証人の携挙も含まれなければなりません。こうして、女が荒野にいる一二六〇日は、患難期の後半に当たるに違いありません。この考え方は竜による女の激しい迫害が、獣による全体主義的独裁の四十二カ月（黙示録13章5，7節）に一致しなければならないという事実によって裏付けられています。

キリストと教会に来た人々に由来する人々を表しているその女は、この時点ではイスラエル人を象徴しているに違いありません。何故なら、教会を含め初期の信者たちは、もはや、世にいないからです。印を押された14万4千人のイスラエル人が、ことによると考慮されていて、大患難を通して救われたすべての国々からの大群衆もいます（黙示録7章9，14節）、けれども、これらの大多数は、確かに殉教の死を遂げ（黙示録6章9～11節、13章15節）、逃れた人々は恐らくエルサレムにはいないはずです。

イスラエルへの侵入を企てたゴグとマゴグが奇跡的に敗北した後（6章での検討内容を見よ）、西側と地中海周辺諸国の指導者との間に結ばれた7年の契約を通して、古代の神殿を建て直しイスラエル人の古代の礼拝を再び実際に行うのをイスラエル人が許可されていたことを思い出されるでしょう。しかしながら、この条約はあの統治者によって契約期間の半分が過ぎた所で破られました。神殿での礼拝は差し止められ、聖なる都は、契約途中で、残りの42週にわたって完全に異邦人の統治という元の状態に戻されるはずでした。（黙示録11章2節）

たとえ大多数のイスラエル人が、まだイエス・キリストを彼らの救い主として受け入れていなかったとしても、彼らは無神論と自由主義を捨て、正統派ユダヤ教に立ち返り、旧約聖書を信じ、彼らの父祖がより頼んだ創造主を信じています。確かに多くの人々は、既にクリスチャンになっていた14万4千人の証人の証の結果、この時点で真面目に新約聖書とキリストの主張を調べているでしょう。

突然の契約破棄は、確かに獣に対する激しい怒りを生み出すはずです。獣は初めは彼らの友であり解放者（救出者）のように思われていました。しかし、今や彼らの敵対者であり迫害者となっていたのです。そして、獣は自分以外のいかなる神礼拝も不快に思い、クリスチャンと正統派のユダヤ人の両方に彼らの信仰を捨て、彼のみを礼拝し従うように要求していたのです。彼らはそうすることを拒否します。すると、彼らを撲滅する厳しい戦が解き放たれます。

イエスが在世中に警告したように、「それゆえ、預言者ダニエルによって語られたあの『荒らす憎むべき者』が、聖なる所に立つのを見たならば、（読者はよく読み取るように。）・・・そのときは、ユダヤにいる人々は山へ逃げなさい。・・・そのときには、世の初めから、今に至るまで、いまだかつてなかったような、またこれからもないような、ひどい苦難があるからです。」（マタイによる福音書15章21節）。キリストによって語られた「山」は黙示録で語られている荒野に違いありません。「女」は今やエルサレムにいる創造主を敬うユダヤ人の残りの者たちです。そして、恐らくそこには多くののキリストにある、新しいユダヤ人のクリスチャンがいて、彼らは生き残るために急いで荒野に逃げるに違いないのです。

その荒野と山々は、多分シナイ地方かヨルダンの向こう側にある山々、または両者を指すのかも知れません。ヨルダン川の向こう側の地域、死海の南と東には、聖書時代モアブ人、アモン人（アブラハムの甥ロトの子孫）とエドム人（ヤコブの兄弟エサウの子孫）が住んでいました。







安河内 壽
ジェネシスジャパン会員読書サークル版／回覧＆コピーはご遠慮下さい。

ある人は「荒野」とは迫害されたユダヤ人が散らされ隠れていた世界中のすべての国を指すと示唆しています。迫害を受けている他の国々に多くのユダヤ人がいるのは確かです。しかし、この所の状況は明らかにエルサレムとイスラエルにいる人々に対する言及で、彼らは、回復された宮の礼拝に参加した人々です。荒らす憎むべき者が聖なるところに立つ（すなわち、獣の人間中心の礼拝のために、像を宮に建てた（13章を見よ）のを見たらすぐ逃げよとのキリストの差し迫った命令は、彼らが直ちに逃げなければならないことを示しています。すなわち飛行機の予約とか、荷造やそれに類したことをする暇もなくという事です。彼らが到達できる最も近い砂漠地域こそ彼らが生き延びる事の出来る唯一の場となるのです。

最も速やかに到達できる砂漠地方は、ヨルダン川と死海の向こう側で、古代のモアブ、アモンとエドムの地域の中にあるのです。そして、これが彼らの行くところであると聖書が暗示しています。例えば、ダニエルは荒れ回る王が終わりの時に起こす軍事行動について記していて、僅かこれら三つの国だけが恐ろしい彼らの軍隊から逃れることを記しています（ダニエル書11章36～45節）。イザヤは、イスラエルの残りの民がモアブとエドムに逃げると記しています。そして、司令部としてセラ（近代のペトラと同じ）について述べています（イザヤ書16章1～5節）。ペトラは数えきれない聖地巡礼の人々が訪れた有名な岩の都で、一時、難攻不落のエドム人の都でした。

彼らがどこに居ようとも、ペトラの様な1つのところに集まっているか又はエルサレムの南と南東にわたる広大な荒野に散らされていようと、これらの創造主を敬うイスラエル人は創造主の特別な保護下に在り、特別な食糧を受けるでしょう。イザヤはこの時期を予測して次のように述べています。「さあ、わが民よ。あなたの部屋にはいり、うしろの戸を閉じよ。憤りの過ぎるまで、ほんのしばらく、身を隠せ。見よ。主はご





自分の住まいから出て来て、地に住む者の罪を罰せられるからだ。」（イザヤ書26章20～21節）

「荒廃した風の吹きすさぶ荒野」で、見捨てられた大勢のイスラエル人には三年半の間確かに食べ物がないのです。それにもかかわらず、主はかつて砂漠で40年の長い間何百万ものご自身の民に食物をを与え、養っていました。そして、主はまたそれをすることが出来ます。マナは「天使の」パンと呼ばれた（詩篇78篇25節）。そして、天使は確かに、再びこの必要に合うように創造主が用いる手段となるのです。

## 天における戦い

天使たちが地上でのこれらすべての出来事に強く関わっている事は、黙示録の初めから終わりまでで明らかです。サタンとその御使いたちはいつも女を迫害しようと心掛けています。それゆえ、ミカエルと創造主につく天使たちは女を護り食物を与えます。この闘争が7節に記された大いなる戦いに突入することになるのかも知れません。

**黙示録12章7節　さて、天に戦いが起こって、ミカエルと彼の使いたちは、竜と戦った。それで、竜とその使いたちは応戦したが、**

たとえ、サタンが大昔、天にある創造主の御座近くにある高くあげられた地位から落とされたとしても、サタンとその御使いたちは、なお「空中の権威を持つ君」（エペソ人への手紙2章2節）として、また、「この暗やみ



安河内 壽
ジェネシスジャパン会員読書サークル版／回覧＆コピーはご遠慮下さい。

の世界の支配者たち」「天にいるもろもろの悪霊」（エペソ人への手紙6章12節）として働くことを許されていました。彼らは世界中の王たちやその領土すべてに自由に出入り出来、地球大気圏を歩き回り支配します。星々に適応される用語「天の軍勢」として聖書に時たま明らかに記され、示唆されているように、彼らはなお恒星天にもある程度近づく事が出来るのかもしれません。

特に、サタン自身は創造主のご隣在の天そのものに定められた時に入る事を許されていました。そして彼はそこに、地上にいる創造主につく人々を訴える者として姿を現わすのです。ヨブ記1章6節から12節と2章1節から7節の良く知られた場面は、私たちの「敵対者」（サタンの意味）と「中傷者」（悪魔の意味）の働きで、サタンの直接の働きを絵画的に記しています。サタンは「私たちの兄弟たちの告発者、日夜彼らを私たちの創造主の御前で訴えている者」（黙示録12章10節）です。主はまた創造主に訴えようとして立っているサタンをゼカリヤに、大祭司ヨシュアに見せられました（ゼカリヤ書3章1，2節）。とにかく、時折創造主の面前に現れる堕落天使はサタンだけではなかったのです。たとえば、アハブ王の時代には「偽りの霊」がいた（Ⅱ歴代誌18章18～22節）のです。

しかし、この状況は今や終わろうとしています。サタンとその軍勢はもはや天を汚す事はないのです。「天は主の天です」（詩篇115篇16節）。サタンとその御使いたちは、創造主の恵みと人を試みるために、数千年そこに居続けることを許されていましたが、彼らを追放する時が来たのです。恐らく、この戦いはおそらく主が御使いと共に天から下って、ご自身の裁きの御座を大気圏の天に移し置かれた時に始まったのでしょう。そこは悪の勢力が何世紀にもわたり支配してきました（Ⅰテサロニケ人への手紙4章16～17節、黙示録4章2節）。大前、大天使ミカエルがダニエルのもとを訪れようとした時、ミカエルは「ペルシャの国の君」、また「ギリシャの君」と





呼ばれるサタンの権力による重大な妨害に出遭っていました（ダニエル書10章12、13、20節）。サタンとその御使いたちは、信者たちの大携挙と地球大気圏へのキリストの御座の移動に強力に抵抗を示すはずです。そして、サタンがイスラエルと地上に残っている信者たちを滅ぼすため、ぎりぎりの努力をする時「天におけるこの大戦争」はかつてない程激しさを増すはずです。創造主は、しばし地球のおおいなる深みから彼らの大軍勢を送り出すことをサタンに許しましたが、これらも今は去ってしまい、サタンはミカエルの率いる天の軍勢と直接戦わなくてはなりません。

**黙示録12章8節　勝つことができず、天にはもはや彼らのいる場所がなくなった。**

勿論、創造主はことばだけで、サタンとその天使たちを滅ぼすことが出来ますが、そうはしないで、創造主は、忠実な天使たちが邪悪な天使たちと戦うのを許されたのです。この復讐は長く差し止められていましたが、ミカエルはついに昔からのライバル（好敵手）との直接闘争に入ることを許されたのです。

彼らは以前に天だけでなく地上でも会っていました。「御使いのかしらミカエルは、モーセのからだについて、悪魔と論じ、言い争ったとき、あえて相手をののしり、さばくようなことはせず、『主があなたを戒めてくださるように。』といいました」（ユダ9章新改訳）。しかし、今や、サタンの第三の天における特権が取り消されることになり、サタンは専ら地球にだけその特権を行使できるのです。ミカエルとミカエルに従う天使たちは、この天からの大いなる追放と天域の浄化を実行するように命じられたのです。そこで、彼らは喜んで精力的に戦いに挑みます。そして、地球自体も最終的に浄化される時を待ち望んでいるのです。



安河内　壽
ジェネシスジャパン会員読書サークル版／回覧＆コピーはご遠慮下さい。

どの武器を用いて又どんな策略でこの天の戦いが行われるかは私たちの理解の及ばないところです。天使たちは、地上の武器で、傷を負わせられたり、殺される事はあり得ません。そして、これら私たちが知っているような物有的力をもってしては、霊的存在を動かすことはできないのです。しかし、このような霊的存在は自然界宇宙で活動できるのです。従って、私たちがまだぼんやりとしか認識できない強力な物理的霊的エネルギーが存在しているはずです。そのエネルギーは宇宙空間を光速より速く天使を移動させ、山を動かし、天体の軌道を変えます。この天における戦いが遂行され、そして（ヨハネを含めた）天にいる目撃者が畏敬の念を抱いて見つめているのはこの様なエネルギーと力なのです。ミカエルが遂に勝利をおさめ、サタンが天から永遠に追放された時、途方もない感謝の叫びが天に響きわたります。

**黙示録12章9節　こうして、この巨大な竜、すなわち、悪魔とか、サタンとか呼ばれて、全世界を惑わす、あの古い蛇は投げ落とされた。彼は地上に投げ落とされ、彼の使いどもも彼とともに投げ落とされた。**

ほぼ間違いなく、これは黙示録のまさにほぼ真ん中の節で、そこに書かれている出来事は、また患難期の真ん中を示しています。二人の証人の携挙、獣によるユダヤの神殿に関わる条約の破棄、イスラエルの脱出、サタンの放逐、獣による世界勢力の私有化は、この患難期の中間点で相互に二三日以内にすべて起こらなくてはなりません。

この節にある邪悪な者の名と肩書の繰り返しは、人目を引きます。すなわち、巨大な竜、あの古い蛇、悪魔、サタンと。確かに、それが同じものを指すことは疑いの余地もありません。創世記にあるあの古い蛇は、





黙示録の巨大な竜で、同時に、ヨブを試したサタンとキリストを試みた悪魔です。彼は創造主と創造主につく民にとって有史以来大いなる敵だったのです。彼らはしばしば光の天使、また、義のしもべと偽って出現しています（Ⅱコリント人への手紙11章14、15節）が、彼は実はシュッと音を立てる蛇、そして火を噴く竜であり、むさぼり食らうライオンです（Ⅰペテロの手紙5章8節）。

特に、彼は全世界をあざむく者であるとの驚くような主張に注意して下さい。教養を積んだ者と無知なる者、王者と生活困窮者、男性と女性、ユダヤ人と異邦人、強者と弱者、黒人と白人は彼に騙されています。すべての世のうぬぼれた指導原理は、造詣の深い思索家によって実に見事に考えられたものです。実用主義、理想主義、グノーシス主義、決定論、快楽主義、物質主義、（カントの）先験的哲学、実存主義、理神論か、または数え切れない他の何らかの主義主張、そして、アリストテエレス主義、プラトン主義、ヘーゲル主義、マルクス主義、毛沢東主義、儒教、仏教、カント学派、フロイド学派など、彼らの名と関連付けられた天才として名高い主義主張にもかかわらず、すべては、創造主により作りだされ、創造主中心で、創造主を誉め讃えると言うより、むしろ人起源であり、人間中心で、人をあがめています。彼らは皆単に創造主を中心にした理論（有神論）ではなくむしろヒューマニズムの変形に過ぎません。そして、彼らは創造主より人をあがめ、こうして創造主を御座から引きずり下ろそうとするサタンの試みを実行する助けをしているのです。

さらに、これらの主義主張は皆創造主のことばを真実で決定的な最高のものとして受け入れることの拒否に基づいています。彼らは創造主のことばを正しく判断するのは人間理性であると主張します。「ほんとうに、創造主が、…と言われたのですか？」は、サタンがエバを試みたように、彼の最初のごまかしでした。そして、サタンはそれ以来同じやり方をしているのです。もしサタンが人に、創造主のことばに質問したり、疑ったり、



安河内 壽
ジェネシスジャパン会員読書サークル版／回覧＆コピーはご遠慮下さい。

修正したり比喩ではないかとか、妥協すべきと人に納得をさせる事が出来たら、その時は最終的に創造主の言葉に従わず、拒否し破壊します。それによって、サタンは創造に当たっての創造主の目的を打ち砕きます。すると、創造主自身はもはや創造主ではあり得なくなるのです。

しかし、サタンはどうして全世界の人に創造主のことばを疑わせ、ヒューマニズムを信じるように騙せるのでしょうか？　答えは、あきらかで、創造主は究極的実態ではない、そして、宇宙自体が唯一永遠の実在であり、実態であると人々に信じ込ませる事によってです。宇宙空間、時間、質量、エネルギー、運動――――これらがただ永遠に正しい原理であり、他のすべての体系（生物または無生物、宇宙または原子の、物質的または霊的）は、進化の揺るぎのたえざる変化状態にあり、今まで変わってきたし常に相対的です。

こうして、すべての信仰と人生観は、ヒューマニズムの哲学体系で、創造主の絶対性とその言葉（聖書）を否定し、ヒューマニズムのすべては進化主義の最も重大なごまかしに基づいています。古代近代を問わず、また素朴なものから複雑なものまで全ての人々の宗教と哲学体系は、基本的には進化論体系であり、ただ一つの例外は、創造主のことばは聖書に基づくものです。

悪魔は全世界を事実上騙しています。それゆえ、彼らは同じ途方もない方法で自分自身を騙しているのです。物質が唯一の究極的実体なので、どうやら悪魔は悪魔を創造したと主張している創造主よりもなんとかして創造主を御座から引きずり降ろし、自分自身が創造主の御座にとって代れると信じているようなのです。これが、有史以来の戦いです。

**黙示録12章10節　そのとき私は、天で大きな声が、こう言うのを聞いた。「今や、私たちの神（創造主）の救いと力と国と、また、神（創造主）のキリストの権威が現われた。私たちの兄弟たちの告発者、日夜彼らを私たちの神（創造主）の御前で訴えている者が投げ落とされたからである。**





諸々の天からすべての悪魔的力が綺麗に排除されサタンがいなくなった時、このことは天の御座に集まっていたすべての群衆の勝利を喜ぶ叫び声の合図となります。恐らくこの御座こそ地獄の天使たちが攻撃の的にしていたものです。なぜなら、これこそサタンが欲しくて欲しくてたまらなかった御座だったからです。しかし、今や御座は全く安全になり、攻撃し続けた軍勢は過ぎ去ったのです。

創造主の御国の到来とキリストの統治は、天にある贖われた群衆によって、すでに何回か祝われており、それはまた、彼らの感謝の賛美の対象です。恐らく、今回の祝いは、かつてないほど感動的です。なぜなら全能の創造主だけでなく聖なる天使たちでさえサタンとその大群を打ち破り得る事が直接の闘争で証明されたのですから、本当にサタンは打ち破られた敵に過ぎません。

感謝の特別な対象は、サタンがもはや創造主に個人的に近づけないという事実にあります。その権利をサタンは贖われた者を絶えず訴えるため長年にわたって乱用してきたのです。もちろん、このような告発がされた時（しばしばその幾分かは確かに正しいけれど、恐らく誤り伝えられたり、また誇張されていたことでしょう）、主イエス・キリストは私たちの仲介者であり弁護士であり（ヘブル人への手紙7章25節、Ⅰヨハネ2章1節）、キリストの血が耐える事のない犠牲の捧げものであり、私たちの罪を清めます（Ⅰヨハネの手紙1章7節、2章2節）。それにもかかわらず、サタンが繰り返し主の面前にでて、地上にまだいる仲間の信者に対し、不安にする動乱を引き起こす告発は、天での苛立ちを強める働きをしているのです。そして、サタンが最後に完全に追放さ



安河内 壽
ジェネシスジャパン会員読書サークル版／回覧＆コピーはご遠慮下さい。

れた時、天における意気揚々とした状態は最も大きくなります。

**黙示録12章11節　兄弟たちは、小羊の血と、自分たちのあかしのことばのゆえに彼に打ち勝った。彼らは死に至るまでもいのちを惜しまなかった。**

天の御座にいる聖徒たちは、おそらくキリストとの慈悲深い「打ち勝つ者」に対する約束（2～3章を見よ）のすべてを思い出しており、最近、地上で悪魔の迫害と天でサタンの告発を経験して苦しみに遭っていた聖徒たちの忠実さをまさに喜んで証言します。「しかし、彼らは告発者（サタン）に勝つ」は彼らの証です。

常のように、罪とサタンの勝利は、信仰と罪の告白というもろ刃の剣によって成し遂げられていた。小羊の血は必要であり、彼らの許しと贖いにとって十分な代償でした。そして、彼らはこれを心から信じ受け入れた。しかし、同じ救い主キリストは、地上で彼らは信仰を公に告白しなくてはならないとも云っておられた。こうして、キリストが真の信仰であることを供述するのです。キリストが天の御座で父なる創造主に自分のものとして彼らを告白される前に（マタイによる福音書10章32～33節）。

これは多くの聖句の者の証です。「なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で・・・信じるなら、あなたは救われるからです。」（ローマ人への手紙10章9節）。「私の口のことばと、私の心の思いとが御前に、受け入れられますように。わが岩、わが贖い主、主よ。」（詩篇19篇14節）。「むしろ、心の中でキリストを主としてあがめなさい。そして、あなたがたのうちにある希望について説明を求める人には、だれにでもいつでも弁明できる用意をしていなさい。」（Ⅰペテロの手紙3章15節）。





さらに、これら患難期の聖徒たちは、有史以来の多くの他の聖徒たちと同様に、彼らの内にある信仰と、そして殉教に直面しても外に対する証を保ち続けました。聖徒たちに対するサタンの中傷は、ヨブに対する告訴が重々呼び合ったように空虚なものになりました。そして、彼らが敵対と嘲笑、迫害と死に直面してさえ信仰の真正さを証明した時、中味のない無意味なものになりました。

**黙示録12章12節　それゆえ、天とその中に住む者たち。喜びなさい。しかし、地と海とには、わざわいが来る。悪魔が自分の時の短いことを知り、激しく怒って、そこに下ったからである。」**

天に移されたすべての人々が天からのサタンの最終的追放で大変な喜びに浸っている一方、地上にいる人々は大きな災いの時になります。地上にいて既に信者である人々は、ユダヤ人異邦人（まだキリストをなお認めなくてはならない聖書を信じているユダヤ人）もサタンとその使いたちが成し得る最も厳しい迫害に耐えるのです。そして、彼らをサタンの激しい恨みと憤りで殺すか、または少なくとも地上で創造主の役に立たない状態にしようとします。サタンが知っている地に住むその他のすべての住人は、速やかに創造主に敵対する強固な軍隊に編成されなくてはなりません。サタンに付く天使たちの軍勢は、不十分である事がわかっているのに、その不足を地上に残されている二億、又はもっと多くの創造主を尊ばない人々で補う事が出来る最後のチャンスとなるかも知れない。それは馬鹿げた絶望的な希望ですが、サタンにとって可能なすべてです。さらに、創造主の予定表ではサタンは後四十二カ月だけ時間があり、そのサタンが動ける時は終わる事をサタンはよく知っているのです。創造主を拒否しているサタンに支配が地と海に住むものの上に確立し、



安河内　壽
ジェネシスジャパン会員読書サークル版／回覧＆コピーはご遠慮下さい。

かつ創造主の御国に入る魂はこれ以上いないと創造主を騙すために地と海に住む人々には彼らが創造主を拒否しているしるしが速やかに押印されなくてはならないのです。

しかし、だれが「海の住人」なのでしょうか。事実、最も古い写本には「の住人」という言葉は出て来ません。しかし、その後継承されたテキストにはあるのです。しかしながら、地と海に対する災いの宣言が自然界の構成物だけを指すというのは意味がないようで、暗にその住人が少なくとも意味合いによって含まれているのです。いずれにせよ、用いられていることばが、海で多くの時間を過ごす、数えきれない多くの人々（漁師、海で商売をする人々、海軍兵士と水上家屋居住者たち）に当てはめられて良いと思われます。水上生活者も地上に住む人々も共にサタンの激怒した目的の対象です。これは第3の災いの宣言です（黙示録8章13節、9章14節と比較せよ）。サタンの怒りと第七のラッパの音は患難期の後半全体に鳴り響きます。この9節は、黙示録全体のではないが、患難期を取り扱っている4章から19章までの真ん中の節です。

## 荒野に帰る

**黙示録12章13節　自分が地上に投げ落とされたのを知った竜は、男の子を産んだ女を追いかけた。**

もはや、天に於いて敵である人とも天使とも、サタンは戦うことはできません。サタンはその怒りのはけ口をイスラエルに求めます。イスラエルとの契約を破り、獣自身の像を拝むように人に強制する獣を抑えつけているのは、疑いもなくサタンであり、ユダヤ人が像を拝むのを拒否する時、罪びとたちに彼らを滅ぼすためにユダヤ人狩りを指示するのもサタンです。

ユダヤ人は歴史上他のどの民族より長く迫害されてきました。そして、この最後の迫害は彼らの完全な徹底した破滅をもたらす目的を持つ迫害です。けれども、創造主はまたもや彼らのために介入されます。そして、彼らは彼らがいる荒野で守られます。さらに、創造主はこの時を古くからの御自身の民である彼らの集中的教育との和解に用います。そして、彼らが三年半のエルサレムから追放の終わりに主イエスが再び地上に来る時、主イエスを彼らのメシアであり、救い主として受け入れるために彼らを整えます。「それゆえ、見よ、わたしは彼女をくどいて荒野に連れて行き、優しく彼女に語ろう。・・・・わたしはあなたと永遠に契りを結ぶ。正義と公義と、恵みとあわれみをもって、契りを結ぶ。・・・・わたしは彼をわたしのために地にまき散らし、『愛されない者』を愛し、『わたしの民でない者』を、『あなたはわたしの民』と言う。彼は『あなたは私の創造主』と言おう。」（ホセア書3章14～23節）

**黙示録12章14節　しかし、女は大わしの翼を二つ与えられた。自分の場所である荒野に飛んで行って、そこで一時と二時と半時の間、蛇の前をのがれて養われるためであった。**

女の急を要する脱出がここで繰り返し述べられています。獣の怒りから逃れるために、彼女は特別な助け「大わしの翼二つ」を求めた（必要とした）。このたとえが驚異的な助けを意味する以外、何も明らかなものはありません。おそらく、出エジプト記19章4節にそれとなく触れているのです。「あなたがたは、わたしがエジプトにしたこと、また、あなたがたをわしの翼に載せ、わたしのもとに連れて来たことを見た。」。この場合、





安河内 壽
ジェネシスジャパン会員読書サークル版／回覧＆コピーはご遠慮下さい。

確かにその比喩は、創造主がイスラエルをエジプトから連れ出す時になされた多くの奇跡に対する言及です。こうして、「鷲」の象徴は天使たちがこれらの奇跡に間違いなく関わっていると考えるのが良いと思われます。ここで同じように、避けて逃げている女は、天使である鷲によってもたらされる奇跡的守護によって助けられるのです。

一度、創造主が備えた場所に女が到着すると、彼女は養われる、食べ物を与えられます。そして、これ（6節）にはまた確かに奇跡的供給が必要です。その期間（一時と二時と半時）は明らかに6節に記されている1260日と同じです。こういうわけで、預言での「時」は一年を意味します。ここでのまれな用語の使用は、恐らく、それをダニエル書7章25節と12章7節に結びつけるためで、ダニエル書では同じ用語が出ており、そして、患難期の後半に対する言及なのです。

女で象徴されているイスラエルの残りの民は、創造主が準備された特定の場所に安全に保たれ続けます。この場所が、ある人が考えているように、ペトラかどうかは全く定かではありません。何故なら特定の地名がつけられていないからです。しかし、女は蛇の面前で養われているのですから蛇には知られています。それゆえ、獣にも知られているのです。サタンがどんなに試みても、荒野で女を滅ぼすことはできません。

**黙示録12章15節　ところが、蛇はその口から水を川のように女のうしろへ吐き出し、彼女を大水で押し流そうとした。**

女のいるところに直接到達できないので、いわば、長距離大砲により頼むかのように蛇は水を川のように





吐き出し、女を避難所から流し出しそうとします。しかし、ここでもそれが表す意味は何か曖昧です。象徴的蛇の象徴的口から来ているので、なぜなら蛇もその口もそこから流れ出る水で表されたものであって、文字通りの川ではないからです。

このしるしの最も近い意味は、蛇にそそのかされて大量の水を吐き出したように、獣が派遣した圧倒的な軍隊をさすのです。ユダヤ人が突然エルサレムから逃げ出した時、立腹した独裁者が起こす反応は明らかにこのようなもののはずです。そして、このような意図は旧約聖書での同じ比喩的表現の用い方と一致しているのです。例えば、エジプトの軍隊がバビロンに来た時エレミヤは次のように言いました。「エジプトだ。――ナイル川のようにわき上がり、川々のように寄せては返す。彼は言った。『わき上がって地をおおい、町も住民も滅ぼしてしまおう。』（口語訳エレミヤ書46章8節）。（エレミヤ書47章2節とダニエル書11章26節も注意の事。）

この比喩の意味がなんであろうと、サタンは、彼らの砂漠の砦にいる創造主を敬うイスラエルの残りの民に対し無敵の攻撃になると思われる物を据え付けます。しかし、創造主はそれにふさわしい対処方法を取られます。「主は激しい流れのように来られ、その中で主の息が吹きまくっている。」（イザヤ書59章19節）「『もしも主が私たちの味方でなかったなら』さあ、イスラエルは言え。・・・そのとき、大水は私たちを押し流し、流れは私たちを越えて行ったであろう。そのとき、荒れ狂う水は私たちを越えて行ったであろう。ほむべきかな。主。主は私たちを彼らの歯のえじきにされなかった。」（詩篇124篇1～6節）

**黙示録12章16節　地は女を助け、その口を開いて、竜が口から吐き出した川を飲み干した。**



安河内 壽
ジェネシスジャパン会員読書サークル版／回覧＆コピーはご遠慮下さい。

彼の激怒と賢さと権力をもってしても、年を経た竜は創造主の庇護のもとにある者に近づく事は出来ません。なぜなら、「あなたがたのうちにおられる方が、この世のうちにいる、あの者よりも力があるからです。」（Ⅰヨハネの手紙4章4節）。（もし、それが実際に、蛇の口からの川が描写している事なら）獣は溢れるばかり大勢の人と武器をもって荒野にいるユダヤ人の後を追ったが、非武装の避難民に力で大いに勝っているけれど、全く彼らを征服できず彼らに接近する事さえできないのです。地面には大きな裂け目が開きます。そして、患難期の広範な地殻移動で振動し不安定になっている地は彼らをのみ込みます。

このような地球上の奇跡は文脈上、実に相応しい。全ての局面は、出エジプトの時、エジプトの王ファラオがイスラエルの子たちを追跡した時に似ています。エジプトの軍隊が紅海で溺れて死んだ時、救出についてのミリアムの歌は「あなたが右の手を伸ばされると、地は彼らをのみこんだ。」（出エジプト記15章12節）であった。その後、時をおかないで危険な反逆は。」「地は口を開いて、彼らとその家族、ならびにコラに属するすべての人々と、すべての所有物をのみつくした。・・・地はその上を閉じふさいで、彼らは会衆のうちから、断ち滅ぼされた。」（口語訳。民数記16章32～33節）とあるように彼らの計画は妨げられた。

この預言の的確な成就に伴うものはすべて、獣と竜の目的にとっては悲惨で壊滅的なものとなります。その証拠上、彼ら（出エジプトのイスラエル人）の奇跡的救出と生命の維持は、避難所で身震いしているユダヤの男女にとって後々まで影響する精神的に説得力のある出来事なのです。

「わたしは生きている、――神（創造主）である主の御告げ。――わたしは憤りを注ぎ、力強い手と伸ばした腕をもって、必ずあなたがたを治める。・・・・わたしはあなたがたを国々の民の荒野に連れて行き、そこで、顔と顔とを合わせて、あなたがたをさばく。わたしがあなたがたの先祖をエジプトの地の荒野でさばいたように、あなたがたをさばく。――神である主（父なる創造主）の御告げ。――わたしはまた、あなたがたにむちの下を通らせ、あなたがたと契約を結び、」（エゼキエル書20章33～37節）云々。

古代のイスラエルの人がカナンの地に入る準備に荒野での40年が用いられたように、この荒野での三年半は、彼らがキリストを受け入れ、千年期の栄光の御国に入る準備をさせるのです。

しかし、このユダヤの残りの民がイスラエルの千年王国の主流となるべきですが、その他多くの信者（または信者となる可能性のある者）が世界のすべての国々に散らされています。これらの人々もまた竜と創造主のどちらにとっても関心の的です。

**黙示録12章17節　すると、竜は女に対して激しく怒り、女の子孫の残りの者、すなわち、神（創造主）の戒めを守り、イエスのあかしを保っている者たちと戦おうとして出て行った。**

竜が女に近づけない（そして、真の末であるイエス・キリストにある者に確かにもうこれ以上触れる事が出来ない）時、竜はその満面の怒りを「女の末の残りのもの」に向けます。こうして、「女の末」（創世記3章15節）に対する長年続いた根深い反目は、この時代のまさに終わり、火の池に最後に投げ入れられるまで続きます。

患難期の折り返し点でユダヤ人がエルサレムから荒野に逃げる時、確かに、後に残される多くの者がいるでしょう。ある者は妥協を良しとし、ある者は、その危険に気付かずまたは聖書について知らないでいるのです。ある者は、ただ何らかの理由で逃げる事が出来ないでしょう。いずれにしても、エルサレムとイスラエルの他のところで生き続けているかなり多くのユダヤ人がいます。そして、これらの人々については、また、





安河内 壽
ジェネシスジャパン会員読書サークル版／回覧＆コピーはご遠慮下さい。

聖書の多くの預言で言及されています。さらに、なお他の諸民族の中に多くのイスラエル人がいて、これらの人についても預言されています。これらすべての人は、終わりの時に厳しい迫害に遭います。ユダヤ人であるためにそして、獣の印を拒否するがために。

このように僅かな見た所、取るに足りないイスラエルのような民族がこんなに多くの注目を浴び世界のすべての多くの国民の関心の的になるのは驚くべきことです。数千年にわたって世界の国々に散らされたイスラエル人が、今でもなおイスラエルの地が彼らの本国であると思っているのはまた同様に驚くべきことです。

今日でさえ、世界の注目は、世界のユダヤ人と共にイスラエル（共和国）に集まっています。将来起こる差し迫った預言は、六章で既に検討したように、ロシアのイスラエル侵攻です。それに続いてロシアは大打撃を受け打ち負かされ、その結果、西側同盟（ＮＡＴＯと欧州経済共同体）が起こり世界で群を抜いた状態になります。その時でさえ、注目はイスラエルに集められ、この同盟の傑出した指揮者（間もなく獣として、罪人、反キリスト、キリストが勝利を収める前の世界最後の独裁者と同じ人物）は、イスラエルと7年の契約を結び、それから、中間点でそれを破ります。多くのユダヤ人が最初の三年半でイスラエルに帰っているでしょう。しかし、多くのユダヤ人はなお離散したままです。そして、彼らがどこにいようとも、獣は、彼らを迫害するため探します。そして、創造主は、それによって彼らが不信仰から救われ、最後には彼らのメシア、救い主として主イエスを知るに至る事を願って彼らを懲らしめます。

多くの聖典が、この大患難と最後の回復を取り扱っています。例えば、エレミヤは「見よ。その日が来る。





——主の御告げ。——その日、わたしは、わたしの民イスラエルとユダの捕われ人を帰らせると、主は言う。わたしは彼らをその先祖たちに与えた地に帰らせる。彼らはそれを所有する。・・・ああ。その日は大いなる日、比べるものもない日だ。それはヤコブにも苦難の時だ。しかし彼はそれから救われる。…わたしがあなたとともにいて、——主の御告げ。——あなたを救うからだ。わたしは、あなたを散らした先のすべての国々を滅ぼし尽くすからだ。しかし、わたしはあなたを滅ぼし尽くさない。公義によって、あなたを懲らしめ、あなたを罰せずにおくことは決してないが。」（エレミヤ書30章3～11節）と述べています。

この結果に対する他の多くの聖典をも注意して見て下さい（レビ記26章40～45節、申命記30章1～5節、イザヤ書11章10～16節、27章6～13節、エレミヤ書23章3～8節、31章7～11節、32章37～41節、エゼキエル書34章11～16節、36章22～28節、そしてダニエル書12章1節）。実際に、旧約の預言書の大部分、特に、イザヤ書は、患難期を通して散らされたイスラエルの残りの民の苦難と約束された祝福を取り扱っています。

明らかに、患難期にクリスチャンになった多くの異邦人が世界の国々にいるのです。黙示録7章9節から14節は、大いなる患難を通して患難期の後半に殉教の死を遂げるすべての国々からの大群衆について、語っています。けれども、ある人々は生き延び、そしてキリストが地上に再臨される時、千年期の世界に住む残りの民となります。

また、これらすべては、竜が大患難の最後の三年半の間死闘を繰り広げる女の末に含まれます。それは「創造主の命令を守り、イエス・キリストの証を保つ」人々です。年を経た蛇——獣と共に蛇の末、それから悪魔の追従者と人の霊的子孫であるその他のすべての大衆は、これらの人々を極悪非道の悪魔的な情熱で憎みます。そして、彼らに間断ない熱烈な思いと残忍さを持って戦を挑みます。



安河内 壽
ジェネシスジャパン会員読書サークル版／回覧＆コピーはご遠慮下さい。

しかし、このすべての迫害にも拘わらず、彼らは死に至るまでこの世のいのちを愛することなく「イエス・キリスト」の証を保ち、創造主の律法を守ることを求めます。極端な時代区分をしている近代のクリスチャンのある人たちは、創造主を敬う人々が最も困難な時代においてさえ、創造主の戒めを守る事がキリストにある証と恵みによる救いと相和すると示唆していますが、これら患難期に迫害にあっていて耐えなければならない状況にある聖徒たちは、これらが両立することを確かに見出すのです。